

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02654

研究課題名（和文）体育授業における即時的な意思決定を促す事前計画作成プロセスに関する研究

研究課題名（英文）A study on developmental process of instructional plan and immediate decision making in physical education

研究代表者

石塚 諭（Ishizuka, Satoshi）

宇都宮大学・共同教育学部・准教授

研究者番号：90793703

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、体育授業の中で適切な意思決定を行うために必要な事前計画立案の視点と事前計画作成のプロセスを提案し、教員養成課程の授業において活用する方法論を提示することであった。そのために教員の事前計画立案に対する意識を明らかにすることに加え、それを支える学習観にも着目してきた。また、準備運動に関する意識を調査することも行った。その結果、事前計画の認識として多くの教師は「授業の具体的なイメージ」を重視していること明らかとなった。これらを支える授業観は、意味ある他者からの影響を受けて強固になることなどが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、教師の判断過程から事例的に実践的知識の在り方を検討してきたこれまでのアプローチとは異なり、教師が既に保有している判断過程の基盤となる実践的知識を明らかにすることであり、実践的知識に関する新たな知見を見出す手がかりを提示できるものと考えた。その成果は、体育授業の中で教師が適切に意思決定を行うために、どのように事前計画を認識しておくことが望ましいのか、という体育の授業改善に資する課題を解決する際の手掛かりともなる、教員養成において、学生に指導する視点を検討する知見ともなり得、事前計画作成時に必要な考え方、授業への生かし方が導出されるという点で意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to propose a preplanning perspective and preplanning process necessary for making appropriate decisions in physical education classes and to present a methodology for use in teacher training courses. In addition, we identified teachers' attitudes toward preplanning and focused on the learning perspectives that support it. Furthermore, we conducted a survey of attitudes toward preplanning. The results revealed that many teachers considered the "concrete image of the class" to be important in terms of their perception of preplanning. It was also revealed that the view of teaching that supports this view is reinforced by the influence of meaningful others.

研究分野：体育科教育学

キーワード：体育 小学校教師 事前計画 意思決定

1. 研究開始当初の背景

(1) 教師の意思決定と事前計画の関連

日本では、1980年代以降、教師が授業を行うためにどのような知識を使用し、思考しているのかというプロセスや意思決定を対象にした研究が行われ、教師の授業中の意思決定は、事前の計画と関連していることが明らかにされてきた。

吉崎(1998)は、教師の授業中の意思決定は、授業の計画に対して、何らかの「ズレ」が起こった場合に起きるとしている。また、佐藤ら(1992)は、事前計画から活動の内容を変更したり、場の修正をしたりするような、教師の「即興的な思考」や「文脈や状況に応じた思考」を重要な教師の力量であるとして捉えている。さらに、久我(2008)は、授業の進行が、事前計画から外れた場合に「教科・教材の目標達成」「子ども主体の学習」の両者の価値基準を軸として教授方法を意思決定していくことを明らかにしている。

石塚・鈴木(2016)は、中学校、高等学校いずれかの保健体育の教員免許状を取得している中堅期以降の小学校教師を対象にして、教師行動を意思決定するまでの思考過程の特徴を明らかにした。具体的には、教師の思考を、事前計画に寄せるように思考するのが特徴である「規準準拠型の思考」と事前計画から離れるように思考するのが特徴である「規準生成型の思考」に分類した。そして、事前計画と授業中の教師の意思決定には強い関連があり、教師の指導行動に影響を与えていることが示された。

(2) 事前計画立案における課題

一般的に事前計画は、学習指導案として整理されることが多く、その作成の手順や検討方法の重要性が指摘され(内田, 1995; 新保ら, 2015)、指導案を立案する力は、教師にとって必要な力量(清水, 2010)とされてきた。

しかし、学校現場の多忙化により毎時間詳細に学習指導案を立てることは困難な現状があることが示され(松浦, 1999; 杉若・伊藤, 2004・岩井, 2005)事前計画は、週案などを代用して作成するなど、教員独自のスタイルに委ねられているケースが多いのが現状である(岩井, 2005)。そのため、日頃実施されている授業の事前計画を作成する思考プロセスは、教師の経験や考え方によって異なる。つまり、事前計画の何を、どのように価値づけているかによって、授業中の即時的な意思決定が方向付けられると考えられるのである。

しかしながら、これまでの研究では、体育授業を担当する教師が事前計画に対して、どのような認識をもっているかということが明らかにされてこなかった。

2. 研究の目的

本研究では、体育授業の中で適切な意思決定を行うために、どのように事前計画を認識しておく必要があるのかを明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、体育における事前計画に対する教師の認識を対象にしている。具体的には、事前計画に対する認識を検討する研究に加え、それを支える学習観の形成や具体的な事柄(準備運動)、小学校と中学校の教師の意識の差などから体育授業の改善の視点を抽出し、体育授業の中で適切な意思決定を行うための基礎資料を得ることを行った。

そこで、研究課題として以下の4課題を設定した。

(1) 体育授業における事前計画に対する教師の意識

小学校で体育授業を担当している教師を対象に、体育の事前計画に対する教師の意識を明らかにする。対象は小学校で体育授業を担当している教師372名であった。質問紙の作成にあたり、一般の公立小学校に勤務し体育授業を担当している教師11名からインタビューを行った(平均年齢)。収集されたデータを要約的に扱いながらデータから生成される概念を説明していく手法(乙幡, 2014)である質的内容分析(Mayling, 2000)を用いて分析し、予備調査を経て17項目からなる質問紙を作成し実施した。

(2) 学習指導要領改訂が小学校教師の学習観の形成に与える影響

「学習指導要領」と教師の成長要因の一つである「授業観」の関連を検討し、小学校教師の体育授業観の形成に学習指導要領が与える影響を明らかにする。対象は、中堅期の職歴を有し、かつ体育科を中心研究教科としている小学校教師とした。加えて、体育授業についての研究・研修に積極的に取り組み、体育授業をはじめとした教育活動における力量向上に意欲的に取り組んでいる教師9名を対象とした。半構造化インタビューによって得られたテキストデータを大谷(2008)が開発した質的データ分析法のSCAT(Steps for Coding and Theorization)を用いて分析した。

(3) 小学校教師の準備運動に対する教師の意識

体育を中心教科にしている小学校教師を対象にして、体育授業における準備運動の実態と教師の意識を明らかにする。対象は、小学校教育研究会体育部会に所属している小学校教師 125 名で先行研究を検討し作成された無記名自記式の質問紙調査を郵送法により実施し分析した。

(4) 体育に関する小中連携教育における教師の意識

小学校で体育授業を担当している教師と中学校保健体育教師を対象に質問紙調査を行い、体育授業における小中連携教育を対象に、体育授業に対する教師の意識を明らかにする。対象は、小学校教師 472 名、中学校教師 145 名で、先行研究を検討し作成された無記名自記式の質問紙調査を郵送法により実施し分析した。

4. 研究成果

(1) 体育授業における事前計画に対する教師の意識

分析の結果、得点の高い項目は「子どもの姿、ゴールをイメージしておく」「大まかな内容を考えておくことが重要」「授業を円滑に進行させるために必要」「教師の視点を考えておくことが大切」の 4 項目であった(表 1)。特に「授業を円滑に進行させるために必要」の項目以外は【授業の具体的なイメージ】に属する質問項目になっており、多くの教師は、事前計画の認識として【授業の具体的なイメージ】を重視していることが示唆された。また、年代を問わず多くの教師は、事前に計画を立てることで授業の具体的なイメージをもつということを重視していることが明らかとなった。さらに、このことが自分たちの資質能力の向上に関連していると捉えていることが推測される。一方で、得点の低い項目として「体育専門の教師の指示を受けて作成する」「学習内容を決めて子どもと相談する必要」「授業中に変更しながら進めるもの」の 3 項目であった。このことから、授業計画は、実態や状況に応じて柔軟に変えるべきではないと考えている教師が多数存在することが推測される。

結果を教職歴ごとに算出し、検討したところ「綿密に計画を立てる」の項目は、中堅期教師がベテラン期教師よりも有意に得点が高い数値を示した。つまり、中堅期の教師はベテラン期の教師よりも綿密に計画を立てることが大切であると認識しているということである。しかし、「授業中に変更可能」の項目では、ベテラン期に比べ初心期の教師のほうが、有意に得点が高い数値を示した。つまり、ベテラン期の教師は、事前計画に対して想定を超えて「変更」しなければいけないほど柔軟には捉えていないということが考えられる。また、初心期のほうが、得点が高いことに関しては、一般に「授業は計画通りに進まない」という言説があるように計画通りに進まないことを肯定的に捉えている可能性も考えられる。そのような認識をもった教師が成長し、中堅期、ベテラン期を経る過程で、計画通りに実施できる力量が備わっていくものと推測される。また、「無駄な時間の削減」の項目に関しては、ベテラン期の教師が初心期の教師よりも有意に得点が高い結果を示した。ベテラン期になると事前計画を立てることで実際の授業中の無駄を省くことができるという認識をもつようになると考えられ、このようなことを経験的に学習している可能性がある。さらに、「教師の専門的知識」の項目に関しては、ベテラン期の教師が初心期の教師よりも有意に高い得点を示した。教職歴を重ねることで専門的知識の重要性が増すことが考えられる。また、初心期時代には感じられなかった専門的知識を使った事前計画の存在に触れる機会が増加しているという可能性もある。

表 1 質問項目の平均得点と標準偏差

質問項目 (要約)	人数 (n)	平均	SD
①事前計画を綿密に立てること	368	3.31	0.69
②教師の視点を考えておくこと	371	3.41	0.70
③1時間の流れを詳細に立てること	372	3.11	0.69
④専門的知識の必要性	371	2.85	0.65
⑤詳細な計画の必要性	365	2.96	0.60
⑥大まかな内容を考えておくこと	372	3.53	0.55
⑦共同で作成するもの	371	2.75	0.66
⑧詳細な時間配分を考えること	371	3.03	0.61
⑨事前計画により無駄な時間を減らすこと	372	3.27	0.64
⑩作成には専門的知識をもった人	371	2.78	0.65
⑪スムーズな進行に必要なもの	372	3.30	0.57
⑫体育専門の教師の指示を受け	371	2.05	0.66
⑬子どもの姿、ゴールをイメージ	371	3.55	0.52
⑭授業を円滑に進行させるため	372	3.43	0.53
⑮学習内容を決めて子どもと相談	370	2.28	0.61
⑯授業中に変更しながら進める	370	2.42	0.66
⑰事前計画の作成は資質能力の	370	3.29	0.51

(2) 学習指導要領改訂が小学校教師の学習観の形成に与える影響

分析・考察の結果、教師の授業観形成に影響を与える要因は様々あり、各教師の語りから 12 の概念が生成された(表 2)。その中で学習指導要領も授業観形成の主要な要因の一つとなることが明らかとなった。

とりわけ、教師の授業観形成に大きな影響を与えているのは〈すぐれた人物との出会い〉であり、教師にとって「意味ある他者」として存在していることが示唆された。この意味ある他者が先駆的にもっていた考えが、平成 29 年改訂学習指導要領の内容と近いものであったと考えられる。そして、その影響を受けて授業観が形成されたところに、平成 29 年改訂学習指導要領が告示されたことにより、その授業観を後押しするように、学習指導要領が影響を与えたものと考えられる。

また、今まで教師自身が持っていた授業観と、学習指導要領の示す内容との間に差異があるために、取り入れるにあたって葛藤が生じ、授業観を揺るがすという事例も収集された。

表 2 各対象者から抽出された概念の一覧

概念名	対象者									対象者数	
	A	B	C	D	E	F	G	H	I		
教育実践上の経験	○	○	○		○						4
子どもの姿	○	○	○								3
自分にとって意味のある学校への赴任	○				○	○					3
すぐれた人物との出会い	○	○		○	○						4
学校内での研究活動					○		○		○		3
学校外での研究活動	○	○	○	○	○	○	○	○	○		9
学習指導要領	○	○	○	○	○	○	○	○	○		9
書籍からの知見	○	○		○	○	○	○		○		7
同僚からの支援			○	○							2
教育実践以外での経験				○		○	○	○			4
行政の出版する手引書	○										1
インターネットからの情報								○	○		2
概念数	8	7	5	5	7	5	6	4	4		

(3) 小学校教師の準備運動に対する教師の意識

分析の結果、体育を中心教科にしている小学校教師の準備運動に対する特徴として、慣例や経験に基づいた形式的な準備運動が行なわれている実態や工夫意欲が高く学習内容に応じた内容を設定しているという実態、心理的な効果よりも身体的な効果を期待して実施されている実態(図 1)が確認された。また、対象とした教師は、経験年数が低いほど準備運動に対する工夫意欲が高く、今後は、準備運動を授業改善の視点の一つとして位置づけることで、体育授業の改善が促進されるものと考えられる。

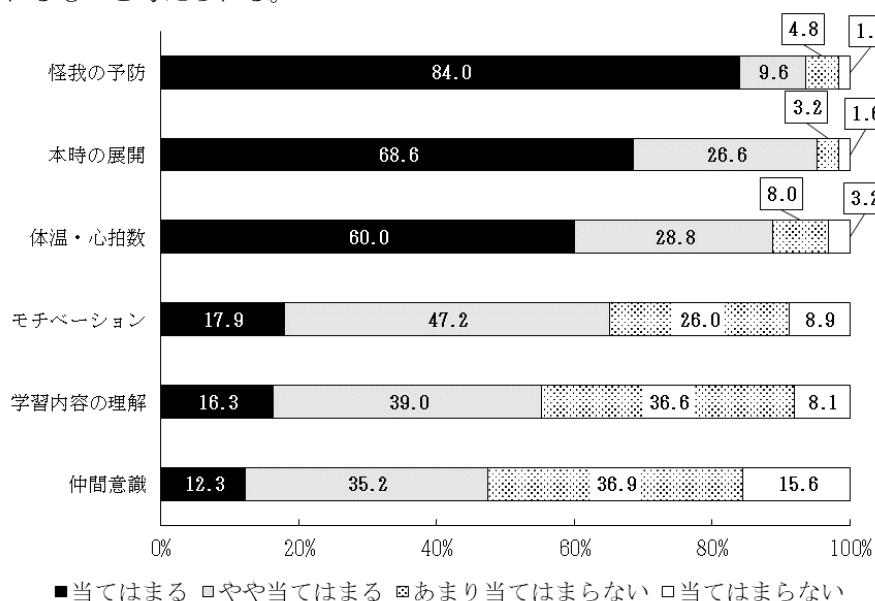


図 1 準備運動において意識している効果

(4) 体育に関する小中連携教育における教師の意識

分析の結果、体育授業に関する連携が十分に行われていない現状や相手校種の教科内容に対する把握度が低い現状が明らかになった。しかし、多くの教師は、体育授業に関する連携を必要だと意識し、今後も行っていきたいと考えていることも明らかとなった。また、「自校種・相手校種への連携に対する要望」を分析した結果、体育授業における小中連携教育を推進していくための視点として、双方の体育授業を理解する機会の充実させることや両校種の教師の目的と役割を意識した連携、資源の共有などが重要であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 石塚諭、稲葉裕紀	4. 巻 6
2. 論文標題 体育授業における小中連携教育の現状と教師の意識	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北関東体育学研究	6. 最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 室井七美、石塚諭	4. 巻 72
2. 論文標題 小学校教師の体育授業観形成に学習指導要領改訂が与える影響	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宇都宮大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 373-388
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石塚諭、阿部隆行
2. 発表標題 体育授業の事前計画における小学校教師の認識傾向に関する研究
3. 学会等名 日本体育学会第69回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 鈴木 直樹、成家 篤史、石塚 諭、大熊 誠二、石井 幸司	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大学教育出版	5. 総ページ数 185
3. 書名 アクティブ・ラーニングで学ぶ小学校体育の授業づくり	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------